

## 善意と文学 —— 語りの「丁寧」をめぐる

## 第16回

## アリスと「イライラ」

——ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』(下)

阿部公彦

Abe Masahiko

## 感情がない？

高橋康也はアリスの世界を「深さを欠いた宇宙」(傍点原著者)と呼んでいる。というのも、この作品には「情動」が欠如しているから。

愛、喜び、悲しみ、絶望、つまり言語の裏側につきまどっている人間的な情念のかげりや深みは、きわめて入念に消去されている。手っとり早い例は、トランプの兵士たちが薔薇——「愛」と「美」をめぐる最も豊かな伝統的連想を秘めた象徴の一つ——にペンキを塗っている場面である。(高橋、93)

たしかにそうだ。高橋の言うように、このトランプの例に限らず、登場者たちが「愛、喜び、悲しみ、絶望」といったものを見せつける場面は皆無なのである。そういう意味ではこの世界は、きわめていびつなのかもしれない。

言語から創られた言語怪獣も、神話的無意識の深層から創られた怪獣に比べると、いわば——マグリットの絵に現れる切紙細工のような——表層の怪獣である。このような二重の絶縁と追放の上に成り立った言語、それによって成り立った徹底的に言語的な宇宙——それは、ちょうどあのトランプの兵士たちと同じように、平べったい、深み・厚み・奥行き・かげりを欠いた、表層の世界でなくてなんだろう。深さのない世界への墜落とは、まことに奇妙なアイロニーだ。(高橋、93)

たとえば『失樂園』や『嵐が丘』がその情動の過剰さにおいて、ほとんどこの世ならぬほどのいびつさを示すのだとすると、『不思議の国のアリス』はむしろ情動の欠如においていびつなのである。その過剰なまでの「表層」らしさのゆえに、私たちはどことなく落ち着かない気持ちを抱かされる。

しかし、たしかに情動は欠落しているかもしれないが、気持ちがまったく動かないわけではない。むしろ心は活発に動き、反応している。上記引用で高橋の言及するトランプの兵士の場面で、もうひとつ目につくことがある。深い情動は欠けているかもしれないが、「イライラ」は前面に出ているのである。

「こら、5、気をつけろ。ボクにペンキがかかっているじゃないか！」

「仕方ないだろ」、5が不機嫌に言った。「7がボクの肘を押したんだ」

すると、7が顔をあげて言った。「ああ、そのとおりさ、5。そうやって人のせいにするがいいさ！」

「お前は黙ってろ」5が言う。「昨日だって女王様が、お前なんか首をちょん切ればよかったぞ」(105)

こうしてみると、このトランプたちにはたしかに関係性が成り立っている。年がら年中「首をちょん切るわよ」とがなり立てている女王も含めて、これらの平面的なトランプたちはみな、〈イライラの共同体〉のようなものに属しているのである。そして、深い感情のからみがないにもかかわらず、互いに怒ったり文句を言ったりすることを通して、互いの存在を確かめ合っているかのように見える。

### ノンセンスと究極の作法

このようなトランプたちの世界は果たしてジョークにすぎないのだろうか。まじめに取り合うに値しない、ただのノンセンスなのだろうか。しかし、これまで私たちが見てきた礼節や作法の世界を成り立たせているのは、まさにこのような表層と平面へのこだわりではないだろうか。不思議の国の住人たちの交わす会話に、作法をめぐる言葉が氾濫しているのもこのことと関係する。ネズミやトランプの場面にも見られたように、この国の住人は「キミは～すべきだ」という言い方をしがちである。「べき」というコードに敏感なのだ。過剰なほどに。だからそれが原因で諍いがおき、騒ぎにもなる。アリスもそんなピリピリした気配を感じ取って、いつも失礼のないよう、コードになるべく従うよう行動しようとする。

「もし差し支えなければ教えていただきたいのですが」アリスは少しおどおどしながら言った。こちらから話しかけて作法に反しないかどうかわからなかったのだ。「……公爵夫人が飼ってらっしゃる猫は、いったいどうしてあんなふうになタツとするのでしょうか」

「あれはチェシャー猫なのよ」公爵夫人が応えた。「だからなのよ。この食いしん坊！」

公爵夫人が最後の言葉をすごく乱暴に言ったのでアリスは飛び上がらんばかりになったが、すぐにそれが赤ん坊に向けられたもので、自分に言われたのではないことがわかった。(83)

公爵夫人が相手だということももちろんあるが、アリスはしきりに「作法に反しないかどうか」(whether it was good manners) に気を配ってしゃべっている。しかし、そのわりに相手はイライラしっぱなしである。これはアリスだけの責任ではなさそうだ。どうやらこの世界では、作法のしきたりは人々を心地良くするために、あるいは善意に形を与えるために機能しているわけではない。そもそも一貫した作法があるのかどうか怪しい。ただ、少なくともはっきりしているのは、住人たちが作法からの逸脱や脱線に伴いがちな「イライラ」だけは共有しているということである。何が作法なのかの共通理解がないのに、みなが相手の不作法に神経をとがらせている。

ここでは、きわめてゆがんだ形で作法意識が働いている。特定の作法が束縛するわけではないのだが、いかにも“作法的”であるような、ルールをめぐる神経質なこだわりばかりがはばをきかせている。これと関連して今ひとつ注意しておくといいいのは、不思議の国における“論理”の働きである。著者ルイス・キャロルの童話作者としての独創のひとつは、童話の世界に論理の遊びを取り入れた点にあったと言われる。再び高橋を引用しよう。

「むかしむかしあるところに……」という呪文の力でどん

な事件でも信じる気持ちになっている読者に対し、これまでの作者も物理学の法則（重力の法則など）を無視するところまでは行った。しかしアリスを悩ます鳩の似而非三段論法や白の女王の《きょうのジャム》の論法など、論理学の法則への挑戦をユーモアの方法としたのは、キャロルをもって嚆矢とする。（80）

世界のいびつなまでの平面性・表層性と、キャロルが童話に導入した“論理の過剰”とは連動している。論理に過剰にこだわり、その一貫性を追い求めるために登場者たちはバランスを失っている。完璧な論理的一貫性をめざすということは、世界がその一貫性に束縛された一面的なものになるということの意味するからである。ときにそれは、不条理で病的な水準に達する。

一見でたらめでてんやわんやのナンセンスと思えるすべての挿話が、その背後に、恐ろしく厳密な法則性、それこそ《不条理》なくらい徹底した条理への志向を蔵していることは、繰り返すまでもない。気違い帽子屋も三月兎もハンプティ・ダンプティもチェシャー猫も、彼ら独自の厳密にして不動の法則によって《自分で完全に支配できる場》に君臨しているのである。（高橋、110）

本来、作法とは他者と共有されることではじめて機能するものである。ところが不思議の国では、みな自分だけの固有の作法に異様なこだわりを見せるのである。そして、その作法を逸脱する他者にいちいち神経を逆なでされ、イライラしたり怒ったりする。しかし、その「怒り」はあくまで作法違反に対する局所的で限定的な反応であり、深い情念へと発展することは

ない。

こうしてみると、『不思議の国のアリス』に描かれているのは、アンチ作法の世界というよりは、むしろ徹底的に作法的な世界だと言える。たしかにこの作品では、登場者たちの作法へのこだわりの異常さがことさら示されるが、そこにあるのは作法に支配された世界を、一步隔たった別世界からあざ笑うという構図ではない。私たち読者も語り手も、そしておそらくはその背後にいる作家も、過剰な表層へのこだわりから距離をとることができないでいる。たとえ作法へのこだわりが各登場者の勝手な執着にすぎないとしても、そうした執着にどっぷりつかからざるをえないその拘束感にこそ、私たちは捕らえられるのである。

不思議の国は、礼節によって支配された世界の延長上にある。いわば、究極の作法の世界なのである。翻って考えると、作法の支配する世界というものは、まさに不思議の国のようにできているとも思える。作法の世界では、「見かけ」がもっとも重要である。善意や愛情も、きちんとした形を与えられなければ意味がない。そこにあるのは徹底した形式主義であり、表層へのこだわりであり、だからこそ、奥にひそんだ情念よりも表に現れた論理の整合性と気遣いのつじつまに関心が集中する。そして、そのように感情を表層のルールや法則に従属させるために、人々の心のあり方にはある傾向が生まれることになる。心は暗い深い部分にある持続的な力に突き動かされるのではなく、短期的で不安定な、動きの速くて細かい衝動性に支配される。そこに「イライラ」の根源があるのではないだろうか。

## 「イライラ」の社会化

18世紀から19世紀にかけては、ヨーロッパで「神経」についての新しい考えが生まれた時代だった。古典古代以来の体液のバランスに基づいた医術にかわり、新しい身体観を推進する人々が現れる。たとえば医学者トマス・トロッター(1760-1832)は「ヒステリア」とその関連症例に関する研究を進め、さまざまな神経症状の原因に“都市化”があると指摘している。従来の農業中心の経済が近代的な商業化の波に飲み込まれると、人々は以前のように狭い地域的なサークルの人々とだけ付き合い合っていればすむわけではなくなる。そのような商業上の要請に応えたのが作法の洗練だった。従来、付き合いがなかったような人間たちが一堂に会し共通の利益を追求するべく交流するためには、付き合いのルールを共有する必要が生じたのである。しかし、このようなルールによる束縛は、人間の本性に反するものでもある。都市生活はまさにそのような本性の抑圧が集約的に行われる場だった。そうした抑圧から解放されるためには、田園に帰る必要があるというのがトロッターの見方だった(ローガン、15-42; とくに 35)。

『不思議の国のアリス』の世界にはさまざまな作法にとりつかれた人々があふれる一方で、そのこだわりは一種異常なものとして描かれてもいる。もちろん、それがそのままトロッターの語るような、過剰な都市化ゆえの神経の衰弱という構図と重なるわけではない。何よりアリスの世界は、都会とは対照的な——そしてトロッターがヒステリーの治癒には是非必要だと考えた——牧歌性のただ中に設定されている。

しかし、キャロルが狂気に関心を寄せていたことはよく知られている。おそらくそれは自身の「症状」への関心に発したも

のである。キャロルは1885年、63歳のとき、比較的軽い発作を起こして「てんかん性」(epileptiform)との診断を受け、その後、10日ほど頭痛に苦しめられている。当時の見方では、てんかんは脳の失調というよりは、精神病の一種とみなされていた。若い頃の症状についての記録はないものの、彼がこれ以前にも何らかの症状を経験していた可能性は大いにある(ウルフ、89)。

このほかにもキャロルは、不思議の国の住人の「イライラ」を思わせるような“症例”も示している。オックスフォード大学のクライスト・チャーチ<sup>コレッジ</sup>校に所属した数学者だったキャロルは、当時学寮に住み込んだ多くの研究者の例に漏れず独身を通したわけだが、年をとるにつれて彼は、そんな共同体での暮らしの中でやや常軌を逸するほどの「こだわり」を示すようになる。ウルフの伝記から引用しよう。

「彼はほんとに文句ばかり言う人でしたね」とキャロルの最晩年、クライスト・チャーチ<sup>コレッジ</sup>校で給仕長を務めていたマイケル・サドレアははっきり言っている。サドレアは誇張しているわけではない。晩年のキャロルは、日々の生活の中で周囲の人と仲良くしようという気持ちを失っていたようである。残存する彼の書簡のうち、実に48通が校<sup>コレッジ</sup>の使用人の怠慢や過失に対する苦情なのである。サドレアのより正確な言い方を借りれば、それらは「キャロルの心地良い生活を妨げる、ごくささいな不都合」にすぎなかった。(63)

イーストボーン教会を訪れたキャロルが、脚乗せのクッションが小さすぎると文句を言い、自分用にもっと大きいものを用意するよう要求したとか、教会で席につくときに、自分用の

座席のほかに自分の帽子用の座席を求めた、といった証言も残っている（ウルフ、63）。

これらの「こだわり」が老年になって急にキャロルにとりついたとは考えにくい。少なくとも本人はそうした自分の傾向を若い頃から知っていただろう。少年時代からのどもり、パブリックスクール・ラグビー校での幸福とは言えなかった思春期など、キャロルの伝記を構成するのは、彼の「こだわり」と表裏一体を成すと思えるさまざまな“生き辛さ”の要因なのである。自分固有の“作法”から抜け出せず、自ずと窮屈な生き方を強いられる不思議の国の住人たちと、どこか通ずる“生き辛さ”である。

こうした“生き辛さ”は、礼節と作法を徹底させた場においては、ある意味で「社会化」されているとも言える。つまり、作法の洗練された社会では、コードの束縛が窮屈さを引き起こす一方、その束縛が人々に共有されることで日常化されるのだし、また、そのような〈束縛の共同体〉の中では、自らの「こだわり」を守ることもある程度許容される。つまり、束縛／こだわりと付き合うことで充足感を得るという生き方が可能になる。そこではルールへの恭順が心の平安を実現する一方、ルールからの逸脱が不安や「イライラ」を引き起こす。振幅の激しい怒りや喜びに替わって、平安と不安との間の、あるいは穏やかさと「イライラ」との間の細かい往復運動が心の動きを作っていく。少なくともアリスを含めた不思議の国の住人たちの「イライラ」への感応度の高さからは、そうした感受性のあり方が垣間見える。

もちろんそんな「イライラ」は、さらなる暗部を抱えこんでいたのかもしれない。たとえば高山宏はキャロルの「規則狂」

の根が、彼の教育を一手に引き受けた父親の厳格なピューリタニズムにある可能性を指摘したうえで、それが「内部の何やらどろどろした欲望とか自己破壊衝動とかに対して、それをあらかじめ悪魔祓いしておこうという知恵」でもあったと言っている。

分裂した内面を抱えこまれたキャロルのような人間が何か行為する場合、自分のどこかを傷つけずにおかぬ自虐的なところが出てくるのは当然である。後にオックスフォード大学の数学講師、聖職者となったキャロルは、「グランディ夫人」なる告発者（世間のこと）の視線に脅かされつつ、年端もいかぬ少女たちのヌード写真撮影に陰気な熱を上げて、スキャンダルを起こした。表面的な潔癖と、抑圧されどろどろした内面的なつまずき、これはある意味ではキャロル一人のみか、彼の生きたヴィクトリア朝そのものの病理でもあった。（12-13）

「規則狂」が「悪魔祓い」の役を果たしたのか、あるいはそもそもそれが、ゆがみを生み出す「悪魔」だったのかは微妙な問題かもしれない。

いずれにしてもおもしろいのは、表層へのこだわりに発する「イライラ」が、『ノンセンスの領域』のエリザベス・シューエルがキャロルとならべて論じた今一人の文学者の持つ傾向とつながるようにも思えるということである。<sup>1</sup> キャロルの T・

<sup>1</sup> この「ノンセンス詩人としてのルイス・キャロルと T・S・エリオット」は、『*The Field of Nonsense* (1952)』より後、1958年に出版されたものだが、高山宏訳の『ノンセンスの領域』（河出書房新社 1980）には付録としておさめられている。

S・エリオットへの影響はエリオット本人によっても認められているが、<sup>2</sup> 現代批評の礎ともなったエリオットの感性感性が、まさに表層への徹底した形式主義的こだわりと文学作法への鋭敏な感受性に発するものだとするなら、私たちの受け継いだ20-21世紀的な精読批評の根源にある「イライラ」にもあらためて敏感になってみる価値はあるのかもしれない。

### 〈文 献〉

\*『不思議の国のアリス』のテキストは、Lewis Carroll. *The Annotated Alice: Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass*. Ed. by Martin Gardner (Harmondsworth: Penguin, 1970/1965) を用いた。その他の文献は以下のとおり。

Eliot, T.S. *Inventions of the March Hare: Poems 1909-1917*. Ed. by Christopher Ricks (New York: Harcourt and Brace, 1998)

Logan, Peter Melville. *Nerves and Narrative: A Cultural History of Hysteria in 19th-Century British Prose* (Berkeley: U. of California P., 1997)

Richardson, Alan. "The Politics of Childhood: Wordsworth, Blake, and Catechistic Method," in *English Literary History*, 56 (1989), 853-68.

Woolf, Jenny. *The Mystery of Lewis Carroll: Understanding the Author of Alice's Adventures in Wonderland* (London: Haus, 2010)

高橋康也『ノンセンス大全』(晶文社 1977)  
高山宏『アリス狩り』(新版)(青土社 2008)

(東京大学准教授)

---

<sup>2</sup> エリオットの初期の作品を集めた *Inventions of the March Hare* に付されたリックスによる前書き (6-8) 参照。